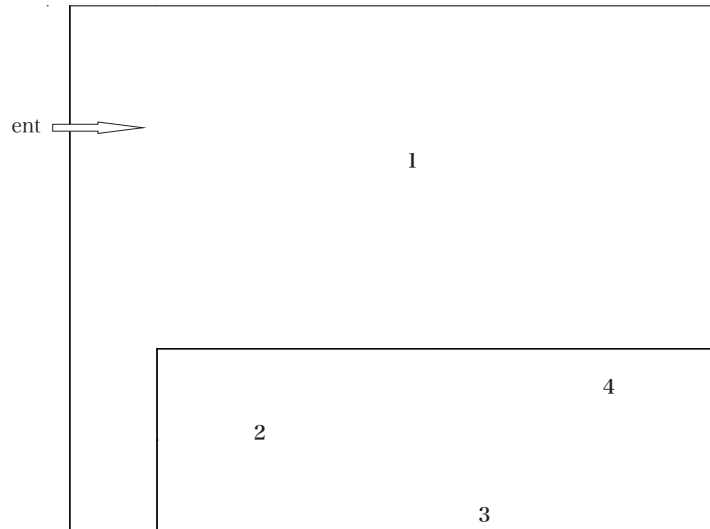


## JCT (35°39' N - 139°21' E)



### 1. JCT (Inner / Outer)

2025 年 銅板, セメント複合材  
H800×W2500×D1000(mm)

かつて市内で使用されていた力織機の部品を複製し、八王子の産業を象徴する工場建築「鋸屋根」の形態と重ね合わせて構成した作品。戦時中、政府の企業整備政策により多くの織物工場が廃業し、不要とされた力織機は金属資源として供出された。加えて八王子空襲では 129 工場が罹災し 1,711 台が焼失し、企業整備後に残っていた力織機は約半数にまで減少した。かつて鋸屋根の下で稼働していた織機を想像しながら、失われた織機の形と、今も街の風景に残る屋根という外側の形を連結させている。

### 2. JCT (Ōwadabashi)

2025 年 透明板, インクジェットプリント  
H300×W300×D60(mm)

大和田橋の焼夷弾による弾痕を保護するために設置された透明板を参照。  
1945 年 8 月 2 日未明にかけて行われた米軍の空襲の痕跡であり、現在もその跡を見ることができる。

### 3. JCT (35°39' N - 139°21' E)

2025 年 銅板, モーター  
H385×W385×D40(mm)

米軍による空襲の爆撃地点を示す「リト・モザイク」と呼ばれる航空写真地図を引用。  
確率誤差円と照準点が書き込まれた参照用リト・モザイクを原寸大で再構成し、回転する円板部分が実際の地図上の確率誤差円に対応している。

参考：奥村喜重『米軍新資料 八王子空襲の記録』（2001 年）

### 4. JCT(loom loop)

2025 年 透明板, スピーカー  
H300×W300×D60(mm)

展示会場にほど近い八王子市中野上町の織物工場で稼働する織機の音。  
1930 年（昭和 5 年）の創業以来、現在までさまざまな織物製品を作り続けている。

八王子は、甲州街道（現・国道 20 号）が東西に走り、国道 16 号が外縁を巡り、JR 中央線と京王線が市内を横断する、交通の結節点として発展してきた地域である。私にとって八王子は、「郊外」や「ロードサイド」といった通過点的な印象が先に立つ場所でもあった。

本作 JCT (35°39' N - 139°21' E) は、この地域に感じられる“ジャンクション性”を手がかりに、現在の風景の中に過去の出来事がどのように結びついて見えるのかを考えたものである。

制作の端緒を探そうと現地を歩くなかで、特に印象に残ったのが浅川にかかる大和田橋である。歩道上には、八王子空襲の際に投下された焼夷弾の跡が、約 30cm 四方の正方形として計 17 カ所示されている。そのうち上下の歩道に一カ所ずつは、実際の弾痕が透明板で覆われるかたちで保存され、残りの箇所は色タイルによって位置が示されている。これらは 1945 年 8 月 2 日未明、アメリカ軍による八王子空襲で生じた焼夷弾の弾痕であり、橋の下に避難した多くの市民が命を救われたことを伝えるため、補修時にこのような形で残されたという。

何度かこの地に足を運び、空襲に関する資料を読むことで、この痕の背景についてはある程度知ることができた。しかし、透明板の内側は気候の状況によって結露しやすく、板自体の劣化による曇りもあって、弾痕の状態をはっきりと見ることができた機会はあまりなかったように思う。

ただ、この「よく見えないけれど、この透明板の奥に大きな出来事の痕が静かに残っている」という状況自体に、想像を持続させる力があるような気がして、次第にここはとても気になる場所になっていった。

八王子空襲では 170 機の B29 が、東京大空襲とほぼ同量の焼夷弾を投下し、市街地の約 80%が焼失、450 名が亡くなった。米軍資料によれば、八王子が攻撃目標に選ばれた理由の一つは「鉄道の接続点であり、東京からの疎開の拠点だった」ためであり、都市と地方の結節点としての性格が、この地の風景を大きく書き換える一因ともなった。

一方で、浅川の北側は延焼を免れ、織物工場が残った地域でもある。鋸屋根の工場建築など、当時の産業を象徴する形態は今も街の中に見つけることができる。かつては工場の内部に力織機が並び、織物を生産していたが、戦時下の金属供出などによって多くの機械は失われ、現在は屋根や外壁といった外側の形だけが、風景のなかに断片的に残っている。川を境に焼失と残存が分かれたこの場所は、大和田橋がかかることで、過去と現在をつなぐ風景の“ジャンクション”として強い象徴性を帯びている。

こうした痕跡や今の風景を往復しながら制作した本作は、歴史資料や当事者の語りに比べれば、ずっとささやかなものにすぎない。私にとって大和田橋の透明板がそうであったように、街の風景に積み重なった記憶の断片を呼び起こしながら、見る人の想像の時間を少しでも長く保つことについて考える。この痕跡を前に、かつてここで起きた空襲の光景を思い浮かべること、今も戦争下にある遠い場所の出来事を重ねて考えることも、この橋を何も知らずに駅へ急いで通り過ぎる人たちの日常を想像することも、同時に起こりうる。

#### 参考文献

『八王子の空襲と戦災の記録 総括編／資料編』（1985 年 3 月）八王子市教育委員会

『聞き書き織物の技と生業』（2014 年 3 月）八王子市市史編集専門部会民俗部会

『ブックレット 八王子空襲』（2005 年）八王子市教育委員会

奥住喜重『米軍新資料 八王子空襲の記録―準備・計画から発令・実行・評価まで』（2001 年 7 月）揺籃社

『八王子の近代史』（1985 年 3 月）かたくら書店

『昭和の戦争と八王子』（2015 年 7 月 10 日）八王子市教育委員会